

徳川みらい学会第6回講演会

「人質」時代の松平竹千代と今川義元

静岡大学名誉教授 小和田哲男氏



七書はすらすら読めます。それをかみくだいて、武将の子供たちに教えていました。

家康は晩年、武経七書の『六韜』『三略』を印刷しています。子供時代に読んで、印象に残っていたのではないのでしょうか。

徳川みらい学会第6回講演会を2月23日(金)、しずぎんホール「ユ一フォニア」で開催。今回は2009年に生誕五百年を迎える今川義元にスポットを当て、歴史研究家の

大石泰史氏が「今川氏『御一家』関口氏について」、静岡大学名誉教授の小和田哲男氏が「『人質』時代の松平竹千代と今川義元」と題して講演しました。小和田哲男氏の講演要旨は次の通り。

(文責：企画広報室)



紅糸威腹巻(静岡浅間神社 所蔵)

義元は竹千代を氏真の補佐役として育てた

私は、家康8歳から19歳までの駿府時代は、優遇された人質というニュアンスを含めて、カッコ付きの「人質」という言い方をしています。比較的自由な少年時代を送ることができました。

父の松平広忠は織田信秀から三河を守るため、今川氏の傘下に入り、松平竹千代は駿府に連れてこられました。

家康が大御所として駿府城を築いた時、江戸増上寺の住職が「なぜ駿府に城を築いたか」と質問したところ、家康は「駿府は自分にとって故郷のようなところだ」と言っています。

竹千代の人質屋敷は、現在の静岡七ノバの東側、今川氏の家臣の武家屋敷があったところにあり、隣は北条氏規の屋敷でした。

今川義元は、嫡男・氏真の補佐役として竹千代を育てようとし

て、優遇しました。それほど、竹千代は聡明だったのです。

義元は竹千代の身体に合わせ、特注した紅糸威の腹巻(鎧)を贈っています。

竹千代は元服の時に、義元の元字を与えられて、元信と名乗り、その後、祖父・清康の康の字を取って元康と名乗ります。これは将来、竹千代が今川氏の重臣になることを保証した形です。

義元が側室にし、関口氏純に下げ渡した井伊直平の娘から、築山御前(義元の養妹)が生まれ、松平元康と結婚することになり、元康は一門待遇となります。

雪斎から帝王学の教えを受ける

竹千代は、雪斎の薫陶を受け、武経七書や『孟子』など中国伝来の儒教的な古典籍を勉強し、帝王学の教えを受けました。禅僧は漢文学の知識をもっているので、武経

兵法書を身につけていた雪斎が、弟弟子の義元を教育し、竹千代を教えた。義元のおかげで、家康は駿府で雪斎の教えを受けたから、天下人になれた。「駿府は故郷のようなどころだ」という言葉は、家康の実感だと思えます。

家康が、恩を受けた今川家から離反して、自立した理由は、桶狭間の戦いで義元と二緒に重臣が何人も討ち死にし、今川氏真より織田信長に将来性があると直感的に考えたからです。

織田信長の甲斐武田攻めで武田氏が滅びると、家康は三河・遠江・駿河の三方国の大名になり、義元の所領を継承しました。本能寺の変後には甲斐、信濃まで手に入れて五カ国の大名となり、本拠地を駿府に遷します。

家康にとって、雪斎から教えを受け、義元から将来を託された、8歳から19歳までの駿府時代は、大きな意味をもっています。